

周囲は木だらけ緑だらけなのに、入口ゲートをくぐってからの園路は山を削って造られたのがらんと開け、直射日光にさらされている。容赦ない太陽が、赤城の汗を煮立たせ、皮膚をじりじりと焦がす。

体がずいぶんなままっていることを赤城は自覚している。

特別なことをしなくても体力は人よりある方で、スポーツをしているのかと尋ねられることもあるほど体格はいい。けれど高校以降、運動らしい運動をしていない。特に就職をしてからは、通勤で最寄り駅までの十分ほどを歩いていく程度だ。外見はどうであれ、こうやって坂道を十分十五分歩くだけでくたびれてしまう。張りぼてもよいところだ。自分がこんなにだらしのない男になったきつかけは、何年たっても昨日のこのように鮮やかに思い出せる。

赤城の背後から、蟬時雨とは違う音が聞こえてきた。

ずいぶん久しぶりに別の音を聞いた気がして、何なのかすぐにわからなかった。

音は大きくなり、背後に迫って、赤城たちを追い抜いた。軽トラだった。軽トラの横腹に「おおくわ山公園」の文字が読めた。公園の管理車両だろう。悪気はないのだろうが、軽トラは追い越しざまに赤城たちにもうつと砂埃をお見舞いしてきた。

汗で濡れたシャツやスーツに、舞い上がった砂埃がこれでもかとはびつりつく。砂で真っ白になっているところもつと白くなつたが今さらだ。腹を立てる気にもならない。むしろ赤城は、坂の向こうに小さくなりつつある車に向かって祈りたい気分になる。

いくら砂を巻き上げても気にしないから停まって、乗っていきませんかと誘ってほしい。

もし、停まってくれたとしても軽トラなので助手席に一人座ったらそれ以上は乗れない。レディーファーストで自動的に益子を選ばれるだろう。どうせ服は汚れてしまったし、竹ボウキやバケツや見慣れない機械が積まれている荷台でもいいから、自分も乗せて上まで運んでほしかった。

「赤城くん。きみ、地元っ子でしょう。へばりすぎよ」

益子がふたたびくるりと振り返った。

弾むような益子の言葉は、蟬の大合唱の隙間を縫い少々夏の毒気をまとって赤城の耳に届いた。

「……大丈夫です、たぶん」

汗が目に入って沁みる。赤城は瞬きした。

赤城はおおくわ山公園のある山吹市出身で、高校卒業まで住んでいた。記憶にあまり残っていないが、幼い頃には両親とおおくわ山公園にも遊びに来たことがあるはずだ。

地元っ子だから山の坂道をすいすい上れると決めつけないでほしい。

山吹市は、地方都市の外れの片田舎だ。市内の大部分には田んぼと畑が広がっている。集落は田畑の間にあり、山も近い。大きな産業も企業もなく、誇れる名産もなく、歴史的価値もおそらくなく、温泉も出ず、有名人もいない。少子高齢化もはなはだしい。いつだったか道の駅ができてから——おおくわ山公園の近くだと赤城は今日初めて知った——人の行き来が増えたと聞くと、町全体には何の影響もない。一言で表せば、個性に乏しい一田舎だ。

赤城は地元が好きではない。

高校時代の自分を思い出させ、そこから続く今のぱっとしない自分も連想させるからだ。

赤城は高校までは勉強でも運動でも取り組めば何でもできたし怖いものは何もなかった。

今やただの人、いや、それ以下かもしれない。仕事でもプライベートでも、これといった楽しみも喜びもなく、毎日を漫然と消化しているだけだ。

何かを始めれば、誰だつてどこかでつまづくことがあるだろう。赤城は一度失敗した。取り返せないまま今日にいたっている。これ以上失敗を重ねるのが怖くて何をすることも踏み出せない自分の姿を意識しないように生きてきた。見てしまつたら、辛うじて保つてきた豆腐のようにふにゃふにゃな自分も崩れてしまう。

帰省するたびに高校までの自分をアルバムの中から引つ張り出されるような居心地の悪さを感じるので、大進学を機に一人暮らしを始めてからは、あまり実家に寄りつかなくなっている。できればおおくわ山公園にも来たくなかったが、きつかけをつくつてしまったのは自分なので仕方がない。

新事業の開催地として、めばしい自然公園の情報収集をしている段階で、赤城は自分の地元候補になりそうな公園があることをうっかり益子に漏らしてしまった。いいじゃない、行つてみましょうよ、と興味を示した益子の目が輝いた瞬間に、赤城は後悔した。

今日、おおくわ山公園に来てしまった事実は変えられない。赤城が今できることは、疲れて重い足を前に動かすことだけだ。

明けない夜はないように、坂の終わりがついに近づいた。

赤くどがった屋根の建物がやつと姿を見せた。赤城が一步進むごとに、赤い屋根の面積は広がり、坂道はなだらかになった。

赤い屋根は扇形の板が重なり合つて、魚のうろこに似ている。屋根も窓枠も塗り直して間がないのか、色が鮮やかだった。建物は山の緑を背景に従えて、どことなくメルヘンチックな雰囲気醸し出していた。廃校になった小学校の木造校舎をそのまま利用していると、公式ホームページに書かれていたことを思い出す。

坂を上りきり、赤城は息をついて立ち止まる。益子は一足先に建物のエントランスをくぐるところだった。

赤城たちを追い抜いていったはずの軽トラが、どこか別の場所を経由したのか静かに赤城たちとは反対側からやつてきた。赤城の方に運転席を向けて、建物の脇に停まる。

運転席から降りてきた作業服の男が、荷台に回つて積まれた荷物を下ろしはじめた。

濃い空色の長袖の作業服に身を包んで、同じ色のキャップを深くかぶっている。首には白いタオルを巻き、軍手をはめ足元はハイカットの安全靴だ。見ているだけで赤城は暑さが増すように感じる。

目をそらそうとして、ふと、男の若くて張りのある背中に目が留まつた。赤城は少し意外に思う。公園の職員は定年後のオヤジ世代かそれ以上のシニアだと勝手に決めてかかっていた。赤城が電話でアポイントメントを取つた時に出た公園の管理責任者の声も、年を取っているようには聞こえなかったことを思い出す。

こんなに暑いところで毎日汗だくになって働いて楽しいのか、赤城には理解できない。自分なら耐えられないと思う。

男は淡々と動いている。赤城のようにくたびれ果てている様子はない。だが暑さを感じていないわけではないらしく汗を拭く素振りをする。キャップの下の頬や鼻の頭が汗で光っている。

赤城は、男をじろじろ見ている自分を自覚して、ようやく目を離せない理由に気づいた。見覚えがある。動作と雰囲気を知っている。

男の顔を窺おうとしても、キャップのひさしに隠れていてなかなかよく見えない。

帽子からはみ出て、耳の上で跳ねている髪の毛先が、茶色や金色を通り越して透明に見える。きらきらと光を弾いているようだった。

彼は髪を染めるタイプではない……そうだ、彼ならどんなものでも丁寧に扱うし、暑いと不満を漏らすこともない。そう考えてから、誰と重ねているのか自問した。

男が誰なのか、赤城の喉元まで出かかっている。グングン喉を突き上げてささえる。

男がついにこちらに顔を向けた。

目はひさしに隠れているが、鼻から下は見えた。

若い普通の男だった。細面で丸みの残る頬に少しぼつてりとした唇。太つておらず、どちらかといえば顔も体も締まって細いのに、なぜか丸っこい印象を受ける。両耳は大きくて丸いカーブを描いている。

その丸みに見覚えがあるどころか、赤城はごく近くで見たことも、手触りも知っていた。

ただ触れただけではなく、撫でて……。

いったん作業をやめ男はゆつくりとした動作でキャップを押し上げた。佇んでいる赤城に気づいたのか、顔を上げて赤城に視線を向けてきた。

太陽が男の顔を照らし出しその丸い目と、赤城の目が合う。

男は一瞬眉を蹙めた。赤城を見ていた瞳が揺れて表情が硬く強張ったのがわかったが、赤城は目をそらせなかった。痛いほど視線が絡む。赤城の胸は急に苦しくてたまらなくなる。

男は赤城に視線を向けたままじっとしていた。

蟬の声も太陽も湿気も砂埃も、赤城と男の間からすつと消えた。

桜の花びらだまりで、赤城は彼と見つめ合っていた。素直でかわいくて、明るくて優しかった。ずつと赤城の心の奥に静かに住み続けていた、実成——。

赤城は慌てて男から視線を外した。坂道のせいで赤城の鼓動は速まっていたが、それ以上に激しくドッドツと鳴りはじめる。

もう一度そつと目を上げると、男はキャップを深くかぶり直し、何事もなかったかのように赤城に背を向けて、赤い屋根の建物に消えてゆくとところだった。

男が遠ざかるにつれ、太陽のキラキラも、蒸し風呂のような湿気も、まわりつく砂煙も、蟬のけたたましい鳴き声も、すべてがすさまじい勢いで赤城に襲いかかる。

——小椋実成。

小椋は赤城が高校時代に初めて付き合った相手であり、これまで付き合った恋人の中で唯一の男だった。